

論文題目 公共図書館の利用と滞在行动に関する研究

本論文は、公共図書館の利用構造、特に図書館の主体的利用者の施設選択と利用行動、そして施設利用の形態に大きな影響を及ぼす図書館の空間構成と利用行為についての考察を通して、今後の公共図書館の建築計画における計画指針を得ることを目的としている。

本論文は5章から構成されている。

第1章では、序論として研究の背景・目的、本研究の構成と既往関連研究での位置づけを述べている。

第2章では、調査対象地域（東京都大田区）・対象図書館の概要と来館者の全体像を述べている。来館累積距離別・所要時間別の来館者属性・利用交通手段を考察し、平均来館累積頻度の50%の範囲で半径約0.6km、80%の範囲で約1.2km弱、平・休日の差はないこと、高利用率の館では利用吸引力は少なく、広い利用圏をもつのは、地域センターである大田図書館（内容重視型）と区を中心に位置する駅前図書館（距離重視型）、他館とやや距離があるが雰囲気の良い洗足池図書館（滞在重視型）であり、利用目的により複数館利用現象があることを示している。全館とも登録率が高い若者に実際の利用継続者は少なく、60歳以上高齢者の利用登録者率は大きく、50歳代は登録者率よりも来館者率の方が高いこと、総じて利用者の主体は高齢者・有職男性・主婦という来館者像を示している。

第3章では、図書館の利用形態論的考察を行っている。ボロノイ図により各図書館を中心に最も近い領域を利用者の居住地として、区内15図書館について利用者の選択利用状況を考察した結果、アンケート回答者の約42%が複数館を利用しており、居住地に図書館があれば、まずそこを選択する一方で他の館も利用するという複数図書館利用（MLU）型が多く、図書館利用圏の複層化を指摘している。業務・商業地域の図書館では単独図書館利用（SLU）型よりMLU型が高い割合を占め、また平日には業務・商業地域での複数利用が盛んな一方、休日では隣接する居住区域間での相互利用の出現など、曜日別の選択利用に差があることを示している。なかでもS館とH館は距離・蔵書数のみではなく別の要因により選択されていることを発見している。複数選択利用者は単独高齢者・有職単独男性ならびに主婦グループが多く、グループ利用では徒歩・自転車による来館が圧倒的であるのは既往研究結果と変わらないが、高齢者のバス利用がやや多く、有職男性の車利用が増加していることを示している。またグループ利用の主婦に比べて、有職単独男性の方が広範囲の複数館選択を行っていることを指摘している。MLU型の中で高率を占める単独高齢者・有職単独男性・主婦グループでは、来館目的・選択理由に相違があり、主婦グループは近い図書館へ、単独高齢

者・有職単独男性は図書サービスや滞在の場の雰囲気魅せられて複数館選択を行っているとしている。

第4章では、利用者が図書館のどこに、どのくらいの時間過ごしているかを分析考察している。平均70%を上回る利用者が館内の複数の場所に拠点を置いており、家族の場合には、場所占有形成率は子供2人含む形と両親を含む形で高い率となり、コーナー利用状況では隣接型での新聞・雑誌コーナーの利用は少なく、子供コーナーを中心とした場所占有が見られる一方、両分型では親・子が各々成人・子供コーナーを占有しているとしている。また図書の利用に限定せずに行為と場所との相関関係を空間・時間の中で利用型を設定し、その構成と特徴を空間構成の型ごとに違いを分析している。読書行為のみを見れば、望ましい利用型は〈相互付き添い〉と〈相互独立〉型があるが、〈相互付き添い〉型は親にとって主目的の利用時間が制約されやすく、成人コーナーでは子供連れと他の成人との軋轢も生じやすいため、親子両方の利用目的のためには〈相互独立〉型がよい、しかし滞在型図書館では非読書行為も多く見られ〈子供主体+親付き添い〉と〈親主体子供付きまとい〉利用型では、特に非読書利用が顕著であることから、読書・非読書行為が不調和にならずに長時間過ごせる環境づくりへの配慮が必要であると主張している。

第5章では、全体のまとめとして公共図書館の建築計画に関する考察を行っている。まず利用者は必ずしも至近の図書館のみを利用するわけではなく、目的に応じて複数館を選択・利用していることを改めて整理している。利用の主な要因としては（サービス優先：内容重視型）（近さ優先：距離重視型）（雰囲気優先：滞在重視型）の3つが存在し、単独館利用者は圧倒的に距離を最優先しているが、複数館利用者は距離を挙げる割合も高い一方、施設のサービスや館の雰囲気が距離の要因を押し下げている傾向を指摘している。また館内観察調査の結果から、家族、特に親子利用の図書館滞在中においては周囲を気遣うことを避け、かつ親の利用主目的に対する制約を減少するために、子供コーナーを成人・読書コーナーから「両分型」にする構成が望ましいことを強調している。最後に今後の図書館施設計画においては、距離だけではなく蔵書数の増加や滞在しやすい館づくりへの考慮が必要であるとしている。

以上のように、本論文は近年の社会状況の変化、特に情報化時代への突入、余暇時間の増大、モータリゼーションの発達、行動様式の多様化などを基盤として図書館の利用構造が大きく変化し、地域的視点からは図書館の相互ネットワーク化・グローバル化、建築的視点からは館内長期滞在化に伴う家族利用・非読書行動への対応といったように、図書館の建築計画やサービス構築を利用者のニーズを改めて十分に把握した上で、より地域社会に密着した方向が求められる状況にあって、現状の詳細な調査によって利用者像・利用行動・利用形態を明かにし、情報システムの発達にともなって図書館に行かなくてもほしい情報が得られる現状の中で、これからは単に蔵書数など施設のサービスを考慮した情報提供の場としての図書館の役割を超えて、積極的に市民の余暇時間過ごす場としての新しい位置付けを今後の魅力ある図書館の施設計画の目標として示唆したものであり、建築計画学の発展に大きな寄与をしたものである。

よって本論文は博士（工学）の学位論文として合格と認められる。